



大木社長

岩治氏が練馬区北町で創業した後、33年に現本社がある板橋区徳丸に第2工場を建設。合資会社を経て42年に株式会社化した。現在の生産拠点である新座工場（埼玉県）は62年に設立した。60年代は総合伸銅メーカーを目指して管やリシ青銅、アルミ材と事業

大手黄銅棒メーカーの大木伸銅工業（本社 東京都板橋区、大木宗治社長）は、創業者の大木岩治氏が1924年（大正13年）11月に大木伸銅所を興してから90周年を迎えた。関東エリアに4カ所の在庫販売拠点をもち、大手ながら小口・短納期のニーズにも応える独自の経営スタイルは、業界再編が進む中でもその存在感を増している。

## 大木伸銅工業 創業90周年

「改革日新」大木伸銅90年史

| 年     | 出来事                        |
|-------|----------------------------|
| 1924年 | 大木岩治氏が練馬区北町で大木伸銅所創業        |
| 33年   | 板橋区徳丸に第2工場建設               |
| 35年   | 合資会社大木伸銅所を設立               |
| 42年   | 大木伸銅株式会社に改組                |
| 45年   | 練馬工場を閉鎖                    |
| 62年   | 埼玉県新座市に新座工場を建設             |
| 63年   | 大木伸銅工業株式会社に商号変更            |
| 75年   | 2代目社長に大木秀夫氏が就任             |
| 90年   | 棒用2900トの間接押出機導入            |
| 94年   | 徳丸工場を閉鎖                    |
| 98年   | 不動産事業部を新設                  |
| 2000年 | 徳丸工場跡にマイカル板橋サティ（現イオン板橋店）建設 |
| 03年   | 3代目社長に大木宗治氏が就任             |
| 14年   | 創業90周年                     |

# 4拠点で小口・短納期対応

## 中身優先し存在感増す

たとえ話。05・07年の資源バブルでは銅価急騰で含み益も出たが「収益状態はまだ決して良くなかった」（大木社長）。収益力が改善したのは06年のロールマージン改定からだ。だが収益改善もつかの間、08年9月にリーマン・ショックが起こる。09年度は伸銅事業で赤字を計上。11年3月には東日本大震災

し、先が見えない状況で雇用も維持していくには、規模や数量より生産性や品質といった「中身」を優先する道を選んだ。モノづくりの力は着実に上がっている。90年に導入した間接押出機の存在も大きい。間接押出は製造管理が難しく、本当に使いこなすまで20年以上かかった（同）。だが、うまく使えば品質面で



新座工場

Bを合わせ約300人が集まり、記念に作成した10年史（05・14年）の冊子を配布した。冒頭の社長メッセージには「改革日新」の手書きがある。これは日々新

しい事にチャレンジするとの思いを込めた前社長との造語だ。大木宗治社長はこの10年を振り返り、経営環境が激変する中、業界内では再編が進んだ。同社も検討しなかつたわけではない。しかし、先が見えない状況で雇用も維持していくには、規模や数量より生産性や品質といった「中身」を優先する道を選んだ。モノづくりの力は着実に上がっている。90年に導入した間接押出機の存在も大きい。間接押出は製造管理が難しく、本当に使いこなすまで20年以上かかった（同）。だが、うまく使えば品質面で

同社のもう一つの強みは短納期対応だ。販売子会社の大木伸銅産業は、新座工場に隣接する東京支店と高崎（群馬県）、諏訪（長野県）、宇都宮（栃木県）に在庫倉庫を構えている。1月に吸収合併するが、4支店での在庫供給体制は変わらない。刻々と変化する黄銅棒市場で、「改革日新」は今後も同社の行動指針になる。ただ、「品質と納期で存在感を示す会社であり続ける」（同）ことが土台であることは変わらない。ぶれない経営方針が100周年につながる道を切り拓く。（田島 義史）